

feature
article

Nagoya City Art Museum

3年後のトリエンナーレはどのように展開されるでしょうか。期待したいと思います。(AN)

たために、完成を待たずして、契約を解除されていた。7月になって、マンハッタンにある〈新労働者学校〉の壁画制作に取り掛かり、21点を完成したのちに、メキシコに帰国している。

ロックフェラー・センタービルでの壁画制作が中断され、ニューヨークでの新たな壁画制作の場所を探し求めていた6月、トロツキーはリベラにはじめての手紙を出していた。

「親愛なるディエゴ・リベラ同志
心からの挨拶の言葉を送ります。あなたの絵は、複製を通じてですが、知っています。中央アジアのアルマ・アタにいる時、アメリカの出版物の別冊で初めてあなたの作品の写真を見ました。あなたのフレスコ画は、男らしさに満ち、静寂感もあり、軟らかさもあり、内部からの力と形態の平衡した静けさに印象づけられました。(中略)それらの作品の作者が、マルクスとレーニンの旗の下にある革命家であることを想像もしませんでした。最近になり、ディエゴ・リベラ師と、左翼反対派に近い友人であるディエゴ・リベラ氏が同一人物であることを知りました。(中略)アメリカを訪問し、あなたの作品の原画を拝見し、個人的にあなたと対話するという希望を今も持っています。(中略)あなたのレオン・トロツキーより。」

リベラがニューヨークでその手紙を見たかどうかは明らかではないが、その後もリベラの画面には、スターリンではなく、トロツキーが描かれ続けた。メキシコに帰国したリベラは、1934年12月に、メキシコ・シティの

国立芸術宮殿に壁画《宇宙を支配する人》を完成する。同作品はこの年の2月に破壊されたロックフェラー・センターの壁画を再制作したものであった。完成を見なかったレーニンの右のパネルには、マルクスとエンゲルスとともに〈第四インターナショナル〉の旗を持つトロツキーの姿が描かれた。^[図3]

1936年9月、リベラは〈第四インターナショナル・メキシコ支部〉を結成、政治活動を本格化していく。

ちょうど同じ時期、パリからオスロに移動・滞在していたトロツキーは、1936年9月ノルウェー政府により身柄を拘束され、同年11月には国外退去を要請された。アメリカ政府がトロツキーからの亡命要請を拒否すると、リベラはメキシコ政府に掛け合い、トロツキーの亡命を受け入れることになる。1936年12月19日、トロツキー夫妻は、秘密裡のうちにタンカー「ルート号」によって出航、翌1937年1月9日にメキシコに到着、その後リベラとフリーダ・カーロが所蔵する〈青い家〉に身を寄せることになる。

トロツキーとリベラは、1938年にはメキシコを訪れたシュルレアリストのアンドレ・ブルトン (1896-1966) とともに「独立革命芸術のために」と題した宣言を完成、「反スターリニズム」を標榜し、「社会主義リアリズム」を糾弾することになる。

だが、リベラとトロツキーの信頼関係は同年末から揺るぎはじめ、翌1939年3月には決裂してしまう。

メキシコにおけるトロツキーの命運が、揺らぎ始めたこの時期、日本に於いて内藤民治は、トロツキーの「日本亡命」を画策、奔走していた。その計画とは、メキシコから石

ぐに会場に入ることができたのですが、中は人で埋まっていました。とりわけ《動植綵絵》を円形に展示した2階は、人、人、人という状況で、人をかき分ける厚かましさも、二重、三重の列に並ぶ根性もない筆者は、早々に会場から退散しました。

一日あたり1万5千人近い観客を集めたこの展覧会。広報という視点で見れば大成功ということになるのでしょう。作品の性質上、会期は短くならざるを得ず、多くの方々への周知を徹底するためには早い時期からの広報が不可欠です。テレビ局と新聞社が組んだ若冲展の広報は、見事な成果を収めたと言えるでしょう。一方で、尋常ならざる待ち時間や、美術鑑賞の限度を超えたような会場の状況に対する批判も少なからず、それをもたらした広報のあり方を疑問視する向きもあります。主催者に話を伺ったわけではないので、ここから先は推測ですが、恐らく主催者側もこれほどの人が押し寄せるとは予想していなかったのでは。確かに若冲は近年ブームになっていますが、過去の展覧会の状況を見る限りでは、これほどの爆発的な入場者を予測することは難しかったと思います。マスメディアを利用した大量の広報を、商業主義的と非難する声もありますが、大量の広報さえ展開すれば成功するのであれば、世の中に失敗する事業など存在しません。誰にも予測のできないところで、歯車がすべてかみ合ったことが今回の結果をもたらしたのでしょう。うまくいかなければ批判され、うまくいき過ぎても批判され、本当に広報は難しいものです。(F)

ます。

現在、スイスのベルン美術館の中にアドルフ・ヴェルフリ財団があり、昨年6月に出品作品を選定するための調査にお伺いしました。ヴェルフリの作品は本の形状になっているのですが、その状態では1点1点の作品を見ることができないため、折りたたんである絵を切り離して広げて額装して作品を見せることになります。収蔵庫の中の膨大な数の作品には、いまだ本の状態になっているものをはじめ、作品の中の楽譜を作曲するために使っていたという紙で作られたトランペットなど様々な資料がありました。残念ながら、本の形状になっているものは、保存の状態から輸送することは難しく、今回は出品に至りませんでした。日本における初めての大大

油を輸入するタンカーにトロツキーを匿い、その脱出・亡命を企てるというものであった。

内藤は、財界からの出資を図り、陸軍ならびに海軍に接近する。樺太をトロツキーの安住の地として想定、そのための布石を拓務省に掛け合い、海軍に対しては、同郷で、後の連合艦隊司令長官となる山本五十六を説得して、メキシコ産の石油を輸入する〈メキシコ石油輸入会社〉の設立に関与、同社の石油輸送タンカーでトロツキーを救出、輸送しようと考えた。

内藤がトロツキー救出の準備と亡命の手はずを進め、あとはタンカーに乗り込むチャンスを待っていた矢先、メキシコではトロツキーに重大な危機が迫っていた。

1940年5月、メキシコ共産党のメンバー20数名が、トロツキー邸を襲撃する。陸軍将校と警官の服装で変装、武装した賊が室内で機関銃を乱射するも、トロツキーとその妻と孫は難を逃れることができた。襲撃グループは、スペイン内戦に、メキシコ人義勇兵として参加した隊員たちであり、その首謀者は画家のダビッド・アルファロ・シケイロス (1896-1974) であった。襲撃後、トロツキーが無傷だと知ったシケイロスは、「何もかもが無駄になってしまった。」とつぶやいたという。

シケイロス・グループによる襲撃から三か月、1940年8月20日、警備を強固にした自宅に於いて、トロツキーは一人の男によって暗殺された。男の名はラモン・メルカデル。三年前、1937年にメキシコ人義勇兵としてスペインに渡ったシケイロスが、バルセロナの〈革命的芸術家同盟〉に加盟する際に仲介をした男であった。

内藤の実行が早ければ、トロツキーは暗殺されることなくメキシコを脱出し、世界は今とは違う歴史を辿っていたのかもしれない。「トロツキーの招待、そして亡命受け入れは、対ソ工作という大乗の見地から案外黙認

感想ノートから

生誕130年記念 藤田嗣治展

エコール・ド・パリを代表する日本人画家であり、パリで最も有名な日本人藤田嗣治の全貌を紹介する展覧会を4月末から7月初めにかけて開催しました。この地方では初めての本格的な藤田の回顧展ということもあり、大勢の方が美術館に足を運んでくださいました。乳白色の下地を生かした優美な裸婦像や愛らしい猫の姿など、藤田のトレードマークともいえる作品が人気を集めたことは感想ノートを読んでいてもわかりますが、とりわけ目に付くのは戦争画に関する記述です。過去の藤田展ではあまり紹介されることがなく、今回の展示で初めてご覧になったという方が多く、それだけにどなたも強い印象を受けたようです。

「タブーの戦争画の中のタブー、《アッツ島》が見ただけでも満足。また、それだけで語られる存在ではないフジタの深さ、奥行きを堪能」。この方だけでなく、藤田の作風が時代によって大きく変化していることに驚かれた感想もかなりありました。「《アッツ島

的な回顧展ということで、長さ4メートル以上にもなる絵巻物の作品が特別に出品されることになりました。

ヴェルフリの作品は、画面いっぱいに余白なくびっしりと様々な事象が描きこまれています。見れば見るほど、より多くのものが見えてきて楽しくなります。彼が描き書いた自叙伝は、全くの想像世界です。その奇想天外さと細やかで多面的に構築された世界は大変興味深い上に、後の近現代美術の到来を思わせるようなコラージュ作品など、コンセプチュアル・アートやあるいはポップ・アートに通じるような表現方法が見られることにも驚かされます。そのように独自に追及した表現欲求へのあくなき挑戦により生まれた魅力的な作品は、多くの芸術家たちにインスピ



【図3】ディエゴ・リベラ《宇宙を支配する人（部分）》1934年 国立芸術宮殿、メキシコ・シティ

されるのではないかとも思われた」という内藤の思惑に対して、陸軍の一部が「トロツキーを前面に押し出しての樺太独立運動だとか、シベリア独立の対ソ謀略だとか、勝手なことを言い出しました」という。

トロツキーの存在とその亡命とは、当時に於いてもそれほどの変想を膨らませるものであった。

当時、中国東北地方には日本による傀儡国家「満洲国」が存在した。また「満洲国」とソ連が国境を接した極東には、ソ連によって1934年5月に建設されたユダヤ人自治州〈ビロビジャン地区〉がある。ソ連と「満洲国」（すなわち日本）は、ユダヤ人を利用し、お互いに国境を接する前線に「配備」しようとする狙いもあった。

ユダヤ系でもあるトロツキーを担ぎ出すことによって、樺太やシベリア、あるいは「満洲国」内に独立国家や自治区が、「建設」されていたかもしれない。勿論、その国家とは「満洲国」と同じく“傀儡”政権であり、トロツキーは溥儀と同じような境遇と役回りを担わされていたであろうが…。〔JT〕

本稿執筆にあたり、下記の書籍を参考にしました。
・小倉英敬『メキシコ時代のトロツキー 1937-1940』（新泉社、2007年）
・「忘れられた人物 内藤民治回想録－日ソ関係の裏面史－（上）（下）」（『論争』1962年12月、1963年1月）

玉碎》。もう二度とこのような悲劇が繰り返されませんように。安倍総理にも是非とも一度は見てもらいたい作品だ」。そうですね。総理がご覧になったらどんな感想を持たれるのか興味深いところです。「戦中の絵は、アッツ島のものもそうですが、サイパン島のものは筆舌に尽くしがたく、何と言えばいいのか、しばらく立ち尽くしてしまいました」。確かに会期中展示室を回っていると、この方のように戦争画の前でじっと立ち尽くしている姿をよく見かけました。「絵画を見て涙を流したのは69年生きてきて初めてです。藤田の戦争画に思わず涙しました」。藤田自身は想像力を駆使して描いたと語っていますが、それでも戦争を実感させるところが画家の力なのでしょう。

悲惨な画面を前にして多くの方がそこに藤田の反戦の意思を読み取ったようですが、画家にそのような意図があったかどうかはわかりません。当時の状況を思えば、むしろ逆の可能性の方が高いのですが、だからと言って反戦を感じる事が間違いというわけではありません。優れた作品は時代を超えて様々な解釈を許すということを、藤田の戦争画ほど端的に教えてくれるものはありません。(F)

展覧会 現在進行形

アドルフ・ヴェルフリ 二萬五千頁の王国

アドルフ・ヴェルフリ (1864～1930) は、アウトサイダー・アート/アール・ブリュットの代表的な作家のひとりとして知られています。スイスのベルン近郊の貧しい家で生まれた彼は1895年にヴァルダウ精神科病院に入院し、66歳で没するまで生涯をそこで過ごしました。そこで彼は『揺りかごから墓場まで』と題する壮大な自叙伝を書きます。テキストと絵と楽譜に彩られたその膨大な自叙伝は25,000ページに及ぶ全45巻の本となってい

レーションを与えてきたのです。

ぜひ、名古屋でのヴェルフリの作品との出会いをお楽しみください！ (hina)



《エン湖での開戦、北アメリカ》1911年

ベルン美術館 アドルフ・ヴェルフリ財団蔵
©Adolf Wölfli Foundation, Museum of Fine Arts Bern



紙のトランペットを持つ
アドルフ・ヴェルフリ
1926年

郷土の作家たち

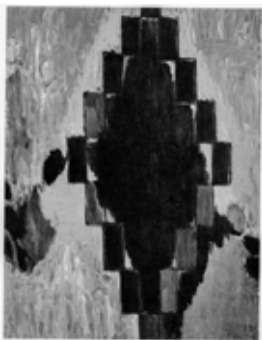
伊藤 利彦(いとう としひこ／1928－2006)

三重県四日市市千代田町に生まれる。1945年に県立富田中学校を卒業、翌年には京都市立美術専門学校日本画科へ入学するも美術雑誌で紹介される西洋美術、特にフランス近代絵画に惹かれ在学中から油絵を描く。卒業後は地元に戻り中学校の美術教諭の職を得たが、肺結核を患い半年間、快方に向かうも1年半後に再発し療養生活を余儀なくされる。20代半ばにして死と向き合わざるを得なかった時間は、画家に《或る時代》《伝説》《死衣》《幡》などの作品群を描かせた。垂直と水平を意識しながら暗闇に隙間なく折り重なったような図柄は、白骨化した人体の集積にも見える。そこに描かれていた頭蓋と眼窩が小さな白と黒の斑点となって次第に平面構成へと変化し、《CUSTOM》においては少しずつ明るさを帯び、《酸化・音》に見られる整然とした印刷網点まで続いている。自己の内面が強く表出した作品群を省みてか、70年代半ばからは“視点”をテーマに据え、1つのモチーフを多角的に捉えて並置する作品や、遠近法を駆使した白いレリーフ状の作品に着手する。わずかな厚みの中に生まれる空間の

どっがおもしろい?!

今回は、2016年の1月から2月にかけて常設展に展示されました、辰野登恵子《WORK86－P－12》(1986年)を採り上げたいと思います。辰野さんは1970年代に絵画を描き始めましたが、その頃の絵画の潮流は、観念的なものに向かっていました。辰野さんも絵画を構成する要素を最小限に抑え、コンセプトを表現しようとするその時代の絵画に影響を受けましたが、やがてそういった在り方に疑問を抱くようになります。そして一度、色と形、筆触といったものによって構成される絵画に立ち返り、絵画の可能性を追求します。

ここで採り上げた作品も、黒、ピンク、紫といった色彩を印象的に用い、奥行き感や感情を絵画の中に表している作品です。抽象的な作品ですが、見る人はそこからさまざまな想像を巡らし、感情を揺さぶられます。以下にご紹介する感想には、この絵に対峙した皆さんのそれぞれに違った捉え方、受け止め方を見て取ることができます。(AN)



《WORK86－P＝12》1986年

「空中に浮いたトランプカードにも見える扉がダイヤ形に配置され、その奥は、くらやみのような黒い影がせまっている。1枚あげたら（めくったら？）その世界へと足をふみ入れ何が起こるのかは・・・ちょっと想像もつかない感じ。黒のまわりにうすいピンク・・・明るい光にも感じられ、希望もある・・・気がします。人生の扉、カードを自分で選んで・・・その先には・・・？？？」(るんるんちゃん♡ 53歳)

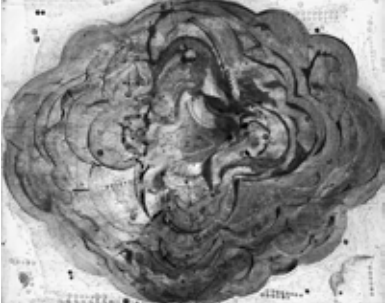
「黒い部分が異次元につながっているような印象を受けました。どろどろしているような暗いものも感じましたが、何かが溢れだそうとしているような、活動的で躍動感のある感じも受けました。」(くま 19歳)

「なかになにかがあるかんじ」(10歳)

「まず、頭に浮かんできたのは、黒いコートを着ている女です。真赤な世界で目立たないはずの黒色だが、なぜか目立つようになった。きっと寂しくなったのでしょうか～」(レイオ27歳)

可能性を追求するうち、形状は一枚物の額装から西洋の三連祭壇画にヒントを得た観音開きや、(展開した形は題材によって異なるが)閉じた際、薄いスーツケース状の箱になる作品へと発展を遂げる。《箱の中のリンゴ》のように、箱を閉じた時モチーフが完全な姿となる作品は、緻密な計算に基づいた制作を好む作家の生来の几帳面さとともに、少年のようないたずら好きの一面を窺わせる。教会や複葉式飛行機、飛行船などを題材に選んだのは理性と規矩に支配された形状の美しさと題材そのものへの憧れ、両方に依るものらしい。

1951年新制作協会に出品、浅野弥衛との交流を機に1957年から64年まで美術文化協会に毎年出品、その後は会派に属さず、教員を続けながら地元三重や名古屋の画廊を中心に個展やグループ展を行い、最晩年まで制作を続けた。(3)



伊藤利彦《CUSTOM 8》1966年

「左右の黒いシミが手のように見えました。中心にある黒いものをその手でつかもうとしているような。真黒なんだけど、何か形のある、そんな感じのものを、ワインレッドの背景に乗せて描いた・・・？ という風に考えました。」(21歳)

「やっと出来上がった作品にあと少し、手を入れようとして、筆から絵の具の1滴がまん中に落ちてしまった、というようです。」

「まわりの赤が血みたいでおもしろい。」(13歳)

「空間のさけめがひらいたような絵だった。」(13歳)

「妙だ。空間が見えず、見え、また見えぬ。先はないが真黒な先に先がある。平たく立体的で、私が見えなくなる。・・・ああ、妙だ。」(21歳)

「黒い部分が人をあらわしているように感じます。その黒い部分の周りが、ピンクのオーラを出していて、何か不思議な気がします。」(Tom 33歳)

「恐ろしくもあり、救いでもあるような。後にはもう戻ることはできない。」(17歳)

「黒と赤・・・おどろおどろしい感じの中にも何か「光」が見えた。「何か出てくる」というよりも「ひきこまれている」という感じが強かった。「世界」を感じられる作品。」(ピカチュウ 13歳)

「不安感。ひし形の構図が不安定。赤色が印象的。夢に出そう。」(東京デモクラシ 16歳)

「生まれてくる瞬間にみえる情景にみえました。美しいです。」

「歩いてくる女性のシルエットだと思うと黒の流れが美しい。」(しり)

「鏡に向かって自分がきれいだとポーズしているちょっと太めの女性に見えました。」(岐阜っ子 32歳)

「この黒い物のすき間から、ピンクの光がもれていたので、黒いドアの奥にだれかが待っているように感じました。人のあたたかさを感じる、温かい絵だと思いました。」(ハマイオニー・グレンジャー 10歳)

「あの奥からなにかがでてきそうな。ふしぎな絵だとぼくは思いました。」(りんご 13歳)

「この絵に遠くから近づいて観ようとしたら、絵の中の女性も今までのキャリアを積み上げて自信まんまんにランウェイを歩くかの様に私に近づいて来る様な気がしました。とても、やる気、パワーをもらえる感じがしました。」(みかお)

「中央の黒い部分、ひし形に置かれている長方形を除くと、女性が立っているように見える。背景の赤と相まって、情熱的な印象を受ける。」(YKK 26歳)

「まわりのびんく色の部分が幕のようなかんじで、まん中に入口がある。本当は暗い場所をかくしているけど、まん中のところから入れる。ちょっとこわいけど、何があるのかなーと思って入ってみたいと思う。」

眞島 建三(まじま けんぞう／1916－1994)

眞島建三は、1916（大正5）年に名古屋市に生まれ、仕事をしながら絵画を学んだ。シュルレアリスムを土台に独自の抽象表現を試みた作家である。1934（昭和9）年から横井礼以（1886－1980）の緑ヶ丘中央研究所に通うほか、安藤邦衛（1889－1971）の安藤洋画研究所にも通った。1937（昭和12）年結成のナゴヤアバンガルドクラブに参加、同年開催の名古屋汎太平洋平和博覧会の美術展覧会に入選する。1938（昭和13）年に上京し、福沢一郎（1898－1992）の福沢絵画研究所に学ぶ。福沢との交流はその死去まで続いた。1940(昭和15)年から1951（昭和26）年まで美術文化協会会員。1943（昭和18）年頃からは軍事工場に勤め、1944（昭和19）年10月に召集され、呉鎮守府の呉海軍航空隊に配属される。地下兵舎建設の穴掘り作業に従事したというが、1945（昭和20）年8月6日の広島への原子爆弾投下後には呉に逃れた市民の救援にも当たった。1945年制作の《遍歴》は、空中にきのご雲を連想させるものが描かれており、美術作品中に被爆の体験が表わされた最も早い例となっている。

戦後は、名古屋で街頭に立ち、占領軍のアメリカ兵を相手に似顔絵を描いて日銭を稼い

イベントレビュー

「ちびっこオアシス」の取り組み

平成3年度から開催している《夏休み こどもの美術館》では毎年異なるテーマに沿ってさまざまな体験活動を展開しています。今年度はあいちトリエンナーレ2016（以下あいトリ）と共催で2つのワークショップを実施しましたが、会期中の3連休を中心に別途、館の単独事業として「ちびっこオアシス」を開設しました（計7日）。

あいトリ期間中は開放的な雰囲気があるのか、乳幼児を連れた来館者を普段より多く見かけますが、過去2回のあいトリ会場を思い返しても授乳スペースやおむつ交換台の案内を見た記憶はありません。当館や愛知芸術文化センターでは救護室を臨機応変に活用していますが職員の案内が必要で気軽に使えるとは言い難く、静かに鑑賞すべきという不文律が未だに幅を利かせる美術館で、乳幼児を連れた来館者は物理的にも心理的にも居場所がないのが現状です。保護者が落ち着いてケアでき、乳幼児は思い切り動ける、快適な居場所づくりを考えました。

地階休憩コーナーの一角にカーテンを取りつけ、安定の良い椅子を置いて簡易授乳スペースに。大きなテーブルを撤去して掃き清めた床には繫いで使うマットを敷き詰め、こどもの体格に合わせた低いテーブルには幼児

イベントガイド

■特別展

永青文庫 日本画の名品

会期：2017年1月14日(土)～2月26日(日)

料金：一般1,300円・高大生800円・中学生以下無料

永青文庫は、旧熊本藩主・細川家に伝わる歴史資料や美術工芸品を管理する公益財団法人で、東京都文京区の旧細川侯爵家の事務所を美術館に改装し、文化財に一般に公開しています。本展覧会は、永青文庫が所蔵する貴重な絵画の中から、菱田春草の《落葉》、《黒き猫》、小林古径の《髪》(いずれも重要文化財)を含む「近代の日本画」34点と、近年人気が高まっている「白隠と仙厓の禅画」23点の名品を紹介します。

【関連催事】

●作品解説会

日時：1月22日(日)、2月18日(土)

午後2時～3時

講師：保崎裕徳（名古屋市美術館学芸員）※いずれも2階講堂・無料・先着180名

■常設企画展（特別展と同会期）

ポジション2017 河村るみ 介（かい）一生と死のあいだ

だ。またこの頃から「くるみ子供美術」を主宰している。1952（昭和27）年から1962（昭和37）年まで福沢絵画研究所で知り合った米倉壽仁（1905－1994）らと結成したサロン・ド・ジュワンで作品発表を行う。1958（昭和33）年から1959（昭和34）年にかけてヨーロッパに滞在。フランスのラスコー洞窟の壁画に感銘を受け、以後「原始言語」と名づけた一連の作品制作に取り組む。帰国後の1959年から彫刻家の野水信（1914－1984）らが1953（昭和28）年に始めた朱泉会に参加する。1977（昭和52）年からはいずれも創立会員であった野水と書家の萩原冬珉（1915－1984）の三人での活動となったが、1984（昭和59）年の両氏の死去により一人残った眞島が翌1985（昭和60）年に最後の会展を開き、その活動に幕を引いた。1987（昭和62）年に名古屋市芸術賞芸術特賞を受賞する。現代美術作家の眞島直子（1944－）は作家の長女である。(み。)



眞島建三《遍歴》1945年
名古屋市美術館寄託

教育の本からヒントを得た布製オモチャやカラフルな洗濯バサミ、大きさや形の異なるふた付きの容器などをトレイに入れて用意し、自由に遊べるようにしました。小学生には画用紙とお絵かき道具、折り紙を用意し、乳幼児用エリアとは地続きにしつつもマットの色を変えて区別し、衛生面にも配慮しました。

短時間の利用にとどまるのでは…との心配をよそに小さな来館者はオモチャやお絵かき、折り紙遊びに熱中し1時間以上滞在することもありました。簡易授乳スペースの利用はわずか4件でしたが、持参したお湯でミルクを作りたいとの申し出には喜んでテーブルを提供しました。急な要望にも柔軟に対応できたのはボランティアの協力のおかげです。

来館者は一様でないこと、一人ひとりが心地良く過ごせ「また利用したい」と思える空間であるために取り組むべきこと、展示の内容や質とは別の観点から美術館に求められているものを考える良い機会となりました。初の試みに理解を示し、穏やかな表情で見守ってくださった来館者の皆さまに感謝申し上げます。(3)



ちびっこオアシス実施の様子

表裏一体にある生きることと死ぬことについて、パフォーマンスと映像を使ったインスタレーションで表現します。パフォーマンスは毎日午後4時から開催。

【関連催事】

●アーティストトーク

日時：2月5日(日) 午後2時から

テーマ：「眼差しを見つめて」

●記念対談

日時：2月25日(土) 午後2時から

テーマ：「看取りについて」

■常設展（特別展と同会期）

名品コレクション展Ⅲ（前期）

名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。

エコール・ド・パリ：シャガールの版画「聖書」より、郷土の美術：三岸節子の芸術他

■コレクション解析学

日時：1月29日(日) 午後2時から

テーマ：「三岸節子とヨーロッパ」

2階講堂・無料・先着180名

講師：中村暁子（名古屋市美術館学芸員）

作品：三岸節子《ブチカナル》1973年

休館日は月曜日（祝日の場合は翌平日）、12月20日(火)～1月13日(金)です。詳しくは、美術館ウェブサイトhttp://www.art-museum.city.nagoya.jpをご覧ください。(KT)

展評

2016年10月4日(火)～12月11日(日)
清須市はるひ美術館

メタモルフォーシス
榊原澄人「永遠の変身譚」

本展は作家の代表作をまとめて紹介する、美術館で初めての個展である。榊原澄人は1980年に北海道で生まれ15歳で渡英、複数の大学を経てロイヤル・カレッジ・オブ・アートを修了、海外でアニメーション製作監督やアーティスト・イン・レジデンスを経験し、現在は長野県在住。公式サイトの肩書には「映像作家、ビデオ・アーティスト、漫画家、あやつり人形師」とある。

ドーム型天井への映写を想定して作られた《Solitarium》では、円環状で見せる大作《E in Motion No. 2》(2013年)よりもさらに個々の事象が複雑に絡み合った世界が展開する。弦楽器の鈍い低音と澄んだ高音とがゆっくりと重なり、響き合うBGM。実世界で目にするものと空想の産物とがない交ぜになってカラフルに描き出され、速度や規模はまちまちだが、大半のモチーフが画面の中を絶えず漂っては変容や一定の動作を繰り返す。ねじれた大きな一本の樹は回転に従って投影位置を徐々に変えるが、映像の中で動くことはない。ただ地中や幹の内部で無数の何かがひっきりなしに動き続けている。それは地中から



榊原澄人《Solitarium》2015年

吸い上げられた水や栄養素が根から幹へ、枝へと移動し、いずれ大気中へ放出されるように、直接目にはすることがないが確かに起こっているエネルギーの循環を表出したものらしい。対流する風もまた同じく見えない形で他の事物の動きを助けている。

映像を眺めながら、万物がとどまることなく時間とともに動き、変化し続けていることを想った。地球の公転／自転、生物学でいうところの動的平衡に似て、不可視ながら確実に存在する力が、主体の意志の有無に関係なく、あらゆるものを動かし全体のバランスを

して、会場を歩きながら、後悔と嫉妬を感じた。少年時代に油絵具がなく、水彩絵具に接着剤を混ぜて描いた《絵のある風景》から古代ローマの悲劇の女性へ幻想を描いた愛知県立芸術大学の卒業制作《ルクレチアへの想い》へ。絵画の根源を問い直す苦闘のなかで《Landscape（風景）》を最後に油彩画から離れ、流れるアクリル絵具の色彩斑点によるレリーフ状の絵画へと転換。そして、アメリカでの個展の《New York Triptych（ニューヨーク三連画）》から幕張でのファルマコンの《Rusted green door-another story（錆びた緑の扉—もう一つの物語）》へ。

壁に掛かっていた絵画が、床に置かれることで、絵画ではなくなることを鮮やかに見せてくれる二つの大作が対峙するに色班空間に挟まれて、名古屋市美術館の開館時点へ、一挙に時間を遡るような感覚に捕らわれていたのである。(sy)



山本富章《New York Triptych》1988年（会場風景）

2016年6月28日－8月21日）で開催され、フリーダの遺品を撮影した作品がまとまって紹介されるとともに、本書によって写真集としてもより身近に親しむことができるようになった。

海外で発刊された写真集は「Frida by Ishiuchi」と題されており、一部重複するものの違う編集である。

フリーダの遺品を撮影する石内の手法は、いつもと変わるところがない。それが心地よく、写っているものが信頼できるものだと私には感じられる。この写真集と前後して出版された『写真関係』（石内都著、筑摩書房、2016年）に収録された「永遠のフリーダ」を読むと、石内がどのような思いでフリーダその人や遺品と向き合ったのかが分かる。既成のイメージを白紙に戻し、演出されない日常の生活のなかにありのままのフリーダを捉えようとしたその姿勢から生まれた写真に違和や物足りなさを感じる人もあるだろう。だが、そこには石内が感じたであろうフリーダの息吹と身体が確かに写し取られている。生身のフリーダを感じ取る感覚、それを石内の写真は誘発する。フリーダと石内の母と広島の人々が同じ感覚で見えるもののうちに立ち上がる。それが石内の誠実さであり、優れた特質でもあることをこの写真集は教えてくれる。(み。)

保っている。作家が「あやつり人形師」を自身の肩書に挙げるのは、一個人の目から見ればひどく残酷な仕打ちやマイナスに映る出来事も世界全体を構成する上で必要な要素とし

展評

2016年11月18日(金)～12月18日(日)
愛知県美術館

コレクション企画 日本で洋画、どこまで洋画？ —高橋由一から現代画家まで—

「洋画」、いわゆる油彩画という大きな題材をテーマにした展覧会だ。日本において「洋画」という言葉は明治期に「日本画」と対になる言葉として生まれたが、日本の近代においては、油彩で描く洋画家は西洋の新しい動向から影響を受けながら、日本の独自の展開を見せてきた。本展は、その洋画の始まりから、現在に至るまでの、油彩画による作品を、同館の収蔵品から紹介しているものである。

展覧会では、「洋画」の概念がどのように始まり、いかに様々な展開を見せてこの言葉の概念が増大していったかということ、また、現在の絵画あるいは作家においては「洋画」や「洋画家」という意識が薄れてきていることを示し、日本の絵画の変化について考えさせるものであった。それにしても、時代ごとに活躍した作家をかなり網羅しているコレクションの厚みに驚いた。当館にも膨大な量の「洋画」のコレクションがあるのだが、愛知県美術館よりも範囲は絞られている。美術館の収集のテーマに関係が深い重要な作家の作品は、その作家の代表的作風の作品のみならず、ある程度作風の展開が見られるように数点から数十点の作品を収蔵することも多く、

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

六本木アートナイト2016 10月21日(金) 17：30－10月23日(日) 6：00

六本木アートナイトは、生活の中でアートを楽しむという新しいライフスタイルの提案と、大都市東京における街づくりの先駆的なモデル創出を目的に、一夜限りのアートの饗宴として2009年にスタートしました。今年は3日間に拡張され、六本木の街なか各所での美術作品の展示のほかに、ダンス・パフォーマンスや公開ファッションショーなどを含んだ、広い意味での「アート」の祭典として実施されました。

今年のアートナイトで注目すべき事柄として、①メインプログラム・アーティストに彫刻家・名和晃平の招聘、②イェッペ・ハインやベーター・フィッシュリ&ダヴィッド・ヴァイスら大物作家の出品、③愛知県立芸術大学出身者たちの参加の三点がありました。名和晃平の彫刻《White Deer》、《Ether》、《People of the Wind》などを核としたインスタレーションは、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館の3つのメイン会場の野外広場に設置され、都会にひと時の幻想的世界を現出させました。壁と壁の間に水のアーチをかけるハインのインスタレーション《Continuity Inbetween》は、シンプルな要素と非日常的な光景のギャップで見る者を驚かせ、フィッシュリ&ヴァイスの名作として知られる映像作品《事の次第》は、芋洗坂の駐車場でビルの壁面に投影され、野外シネマ

で捉える、俯瞰の視点に起因するのかもしれない。ゆったりとした時間の流れ、不思議な安堵感と同時にやるせなさや切なさを覚える映像作品だった。(3)

数はあるのだが、日本の近代洋画の歴史における重要作家の作品を網羅できているわけではなく、このような包括的なテーマの展覧会をコレクションだけで組み立てることは難しい。コレクションの力をつくづく感じる展覧会だった。

また、この「洋画」というテーマで近代から現代の作品を紹介することで、絵画の様式の変化から、時代の感性の変化を如実に感じることができたことも面白かった。特に、戦後の洋画における、油彩絵具や描かれている物の物質感あふれる具象画や抽象画と比べると現代の作品には、画面の扱い方に映像や写真などのイメージ画像的な要素が感じられる。ひと昔前はデジタル画像をこんなに大量に目にはすることはなかった。時代とともに人々の視覚は変化している。また、国内にとどまらず国際的に受容されている現代の絵画に「洋画」という日本独自のカテゴリーは窮屈になっているようだ。私たち日本人の感性もどんどん変化しているのである。(hina)



高橋由一《不忍池》1880年頃 油彩/画布 愛知県美術館蔵

さながら、多くの観衆を引きつけていました。Tokyo Midtown Award 2015のアートコンペでグランプリを受賞した田島大介（2015年愛知県立芸術大学彫刻専攻卒業）は、高層建築がひしめく架空の街を細密に描くペン画の公開制作を実施。また、同コンペで優秀賞を受賞した三上俊希（2016年同大学院彫刻領域修了）は、観客が手動のポンプで作品の一部を膨らませる参加型の立体作品を展示していました。今年度のコンペでは、大塚功季（同大学院油画版画領域在籍）がトラロープを素材にした火焰型土器のような造形で準グランプリを受賞しており、今後の活躍が期待されます。

最も強い印象を残したのは若木くるみの《車輪の人》でした。これは六本木通りに面したビルの一階に、ハムスターの運動器具のような装置をおき、その中を作家が2日間走り続けるというものです。ゴロゴロと鈍い音を響かせながら、黒い全身タイツ姿の女性が車輪の中を走り続ける異様な光景に、たまたま前を通りかかった人々も思わず足を止め、そのコンセプトに驚嘆して声援を送っていました。今年のアートナイトのキャッチフレーズは「六本木、アートのプレイグラウンド～回る、走る、やってみる。～」でしたが、《車輪の人》ほどこのフレーズを体現した作品はなかったでしょう。シンプルで力強く、完成度の高いパフォーマンスでした。(nori)



若木くるみ《車輪の人》

BOOK

『フリーダ 愛と痛み』
(石内都著、岩波書店、2016年)



母の遺品や身体に残る傷跡を撮影した写真で知られる石内都が、広島の原爆で被爆した人の遺品を撮影した「ひろしま」シリーズをきっかけとして、メキシコの女性画家フリーダ・カーロの遺品を撮影した。本書はその写真集。

撮影は2012年に行われており、作品もそれを収録した写真集も日本より早く海外で発表と発刊がされている。「Frida is」と副題された石内都展が、資生堂ギャラリー（会期：

【編集後記】

「アートペーパー」103号をお届けします。

決して多くはいらっしゃらないかもしれませんが、それでも毎回の特別展をご覧いただいている名古屋市美術館リポーターの皆様や、あるいは散策や飼い犬との散歩で美術館南側の庭園を通られる方はずにお気づきかもしれませんが、美術館敷地南端に設置、展示されていたデイヴィッド・ナッシュの彫刻作品《降りてくる舟》が“倒壊”しました。今年の9月、前夜台風10号が当地を通過した21日午前10時頃、地中に設置していた作品の根元部分から折れ、崩れました。経年によりひび割れた表面から、雨水が内部に浸み込み、時間をかけてその内部組織が腐食していったようです。幸いにも通行者等を巻き込むような事故に至ることはなく、また植込みに倒れたため、作品の損壊は比較的軽微に済みました。

都心の公園に設置された同作品は、四季の移り変わりのなかで、現代美術と自然の見事な共演を見せていました。とくに紅葉の時期には、その焦がされた黒い表面と、周囲のイチョウやボプラの黄色や赤とのコントラストは目を見張るほどのものでした。

保存・修復、さらには将来復旧することを目指して、現在作家との協議を進めています。

開館三十周年目を迎える来年2017年は、更なる充実を目指す“RE-START”の年となりそうです。(J.T.)

アートペーパー第103号 発行日：2016年12月1日

発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄[伏見駅・大須観音駅・矢場町駅]下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
開館時間：午前9時30分～午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで



Nagoya City Art Museum